恋愛ターゲットなんて
まっぴらごめん！

Sakura & Syuuichi

沢上澪羽

Reiha Sawakami

EB

エタニティ文庫

目次

恋愛ターゲットなんてまっぴらごめん！　5
書き下ろし番外編
あなたのために変わりたい　333

恋愛ターゲットなんて
　まっぴらごめん！

1　ライフプランを賭けたゲーム

数多くのビルが立ち並ぶオフィス街に、佐伯製薬本社ビルはあった。古くから続く製薬会社で、どこのドラッグストアでも、この会社の栄養補助食品や内服薬を見ることが出来る。

とあるよく晴れた午後、その本社ビルの第二会議室では、企画室所属メンバーによる新商品の開発会議が行われていた。

本日の会議の内容は、新商品のパッケージデザインについて。

昼食後で満腹な上に、暖かな日差しが降り注いでいる。そのため、誰もがあくびをかみ殺していた。だが、紺野咲良だけは違った。いつでも発言が出来るようにと、パソコンのモニターと、現在発言中の室長、佐伯柊一を交互に見つめていた。

「……で、新商品の鎮痛剤のパッケージデザインなんだが、アンケート結果はどんな感じなんだ、紺野」

名前を呼ばれた咲良は、しゃきっと背筋を伸ばした。そしてずり下がった黒縁めがね

を中指で押し上げると、パソコンを操作しながら口を開く。

白のブラウスに黒の地味なスカート。黒縁めがねの上半分は厚ぼったい前髪で隠れている。真っ黒な髪の毛も後ろでただ一本にまとめているだけ。

仕事ができそう、というよりも、野暮ったさを絵に描いたような格好だ。化粧っ気もほとんどなく、年頃の……とても二十四歳の洒落っ気は見て取れない。

咲良としては「そんなもん」必要ないと思っている。仕事ができれば、格好なんてどうだって構わないと。それに、別に誰も自分のことなど見ていないだろうとも。

「はい。ウェブで行ったアンケートの結果ですが、鎮痛剤のパッケージカラーとして好まれた色は上位から、ブルー、ホワイト、グリーン、となっています。そしてデザインは僅差ですが、B案が支持された結果となっています。ですので、アンケート結果を反映させ、デザインB案を、ブルーを基調として作成するのが無難ではないかと思います」

アンケートの結果から、咲良は冷静に分析結果を口にした。

「うーん……無難、ねえ」

けれどそれが気に入らないのか、柊一は眉間にしわを寄せ、腕組みをしている。彼はそうやってしばらく考え込んだあと、彷徨わせていた視線を咲良に向けた。

「まあ、確かにアンケートの結果を考えれば、その分析は妥当だし無難だな」

と言いながらもどこか不満げな柊一に、妥当で無難なら何も問題ないじゃないかと、

咲良は内心でぼやく。柊一が納得していないことは何となくわかった。でも咲良はこれが最善だと思っている。

「なあ」

「はい」

「この結果だけでは少し足りない気がしないか？」

柊一の言葉に、咲良は思い切り眉をひそめて彼を見た。

アンケート結果は完全に第三者の意見のみの、公正で信頼出来るデータのはず。データは人間と違って嘘をついたりはしないのだから。それにこのアンケートを実施する前、質問項目についてもきちんと話し合って決めたのだ。今更「足りない」とか言われても正直困る。

「どういうことでしょう？」

ため息まじりの咲良の言葉に、柊一はひとつうなずいてから口を開いた。

「色についてもデザインについても、好みの傾向はアンケート通りで間違いないだろう。けれど、デザインB案とD案が拮抗しているのがどうしても気になる」

確かに、それは咲良も気にはなっていた。二つのデザインの支持は本当に僅差だった。

「……けれど、たとえわずかでも支持の多いBとするのは妥当だと思いますが」

「まあな。ただ、アンケートでは実際の色つきの画像は載せていない。だとしたら色付

けすることでかなり印象が変わる可能性もあるとは思わないか？」

咲良はその言葉に首をひねる。

一番好まれるカラーと、一番好まれるデザイン。それらを組み合わせれば一番いい物が出来上がるのでは？

「もう一度アンケートを取り直そう」

柊一の提案に、眠そうにあくびをかみ殺していた面々は、さすがに目を覚ましてざわつき出した。デザインの最終決定まで、残された期間はわずかだ。それを、アンケートからやり直すとなると、間に合うかどうかさえ怪しくなってくる。

けれど、誰ひとりとして柊一の意見に異議を唱える者はいなかった。それは彼の意見に賛同しているからではない。単に自分以外の誰かが発言するのを待っているだけだ。そしてメンバーの視線は自然と咲良に集中する。

「室長、それでは間に合わなくなる可能性が出てきます。データ上、一番支持されたカラーとデザインを使ってパッケージを作成するのは妥当なはずです」

「確かにね。お前の言う通り、妥当で無難だろうな。けど、無色のデザインと色のついたデザインとでは、かなり受ける印象は違うと思う。だとしたら、上位三色で色付けしたデザインB案とD案の画像を使った上で、もう一度データを取ってみれば、また違った結果が出るかもしれない」

確かにその可能性はある。だが、あくまでも可能性であって、本当にアンケート結果に明確な違いが出てくるかはわからない。

他のメンバーの意見も割れているのか、柊一の言葉を受けてさっきとは違うざわつきが会議室に広がっていく。

「紺野」

「はい」

「アンケート、お前だったら短時間で作り直すことも可能だな？」

そう問われ、咲良は眼鏡の奥の目をすっと細めて柊一を見た。馬鹿にされては困る。前回のアンケートだって、咲良がひとりで作ったようなものなのだから。

「もちろんです」

そう答えると、柊一はくしゃっとした柔らかな笑みをその顔いっぱいに広げた。

「よし、さすがだ。じゃあ決まりだな」

「しかし、時間がそれほどありません」

「んなもん、もしもの時は俺がどうとでも引き延ばしてやるさ。要はいいもんができればいいんだよ。時間を惜しんで中途半端な物を作るより、ベストな物を作った方が気持ちいいだろうが」

一片の不安もないような笑みで、柊一が周囲のメンバーに視線を向ける。その瞬間、

さっきまで不安げだったメンバーの顔が一気に変わった。「そうだ、いい物を作ろう」とでも言うように。

振り出しに戻ったと言うのに、さっきよりやる気を出しているメンバーたちを尻目に、咲良はそっとため息をついた。

――苦手。ああ、苦手……

それは紛れもなく、咲良の佐伯柊一への評価だ。

熱意に溢れ、仕事熱心。多少強引でも、周囲を引っ張っていくリーダーシップを兼ね備えている。

挙句の果てに、この佐伯製薬の御曹司で、次期社長。

二十八という年齢で室長というポストは、出世している方なのかもしれない。が、次期社長になる人間なら、もっと上にいてもいいような気がするのだが。なぜ柊一がこのポストに甘んじているのか、咲良にはさっぱりわからない。まあ、それ以前に興味もない。

ただ、小さな頃から恵まれた環境で育ち、地位も財産も、人望さえも併せ持っている柊一が、咲良はとにかく気にくわなかった。……多少の妬みがあることは否定出来ないが。

――しかも、だ。

「紺野、もうすぐ終わるか？」

不意に背後から声をかけられた。咲良は手も止めずに、パソコン画面に向けていた視

線をちらりと上げる。
「アンケート、どこまで進んだ？」
無駄に甘いマスクがそこにあって、咲良は思わず小さくため息をつく。
そう、財産も地位も人望もある柊一は、女子社員達から「王子様」と密かにあだ名をつけられるほど、整った顔立ちをしているのだ。
さらっさらの栗色の髪の毛に、目尻がやや下がった優しそうな二重瞼の瞳、すっきりした鼻筋に引き締まった大きめの口。すらりとした長身で、スマートにスーツを着こなしている。「王子」と呼ばれるのもわからなくはない。
そんな「王子」こと柊一の周りには、いつも華やかで綺麗な女子社員の姿があった。
女子社員の方から柊一を誘っていることもあれば、その逆もある。そして会社が終われば、楽しげに夜の街へと消えて行くのだ。彼の誘いを断った女子社員がいるとは、聞いたことがない。まさに「無敗の王子」といったところだろうか。そうやって人の目もはばからず会社でナンパまがいのことをしている柊一が、咲良は苦手だった。
いや、むしろ生理的に受け付けないと言ってもいいかもしれない。
次期社長だか何だか知らないが、会社は仕事をするところであって、ナンパをするところでは断じてない。チャラ男という人種を、咲良は認める気はなかった。
「もうすぐ終わりそうか？　もうみんな帰ったぞ」

柊一の言葉に、咲良は周囲をぐるりと見回した。確かに室内はがらんとしている。時間も既に二十一時を回っていた。
「はい。もう終わります」
咲良はモニターに視線を戻し、それだけ答える。
会議が終わってからずっと集中して作業を進めていたので、こんな時間になっているとは思わなかった。しかし、本当にあと数分もあれば終わるだろう。
そう、誰も咲良を邪魔しなければ、の話だけれど。
「紺野、それ終わったら食事にでも行かないか？　無茶な依頼をしてお前が遅くなる原因を作ったのは俺だからな。もちろん俺の奢りで」
「結構です」
考えることもなく咲良はお断りする。
「遠慮しないでくれ。それでなくてもぎりぎりのスケジュールで無理させてるんだから」
「お構いなく。仕事ですので」
「いや、でもそれじゃあ、俺の気持ちが」
「仕事ですので、何とも思っておりませんので」
きっぱり。
咲良はモニターから視線を上げ、真っ直ぐに柊一へ向き直る。すると柊一は目を瞬か

せ、それから苦笑いを浮かべた。
「もしや俺、嫌われてるか？」
「別に好きでもなければ、嫌いでもありません」
好きだとか嫌いだとか、そんな特別な感情は抱いたこともない。ただの職場の上司というだけ。咲良は会社に仕事をしに来ているのであって、人間関係を広げようとか、社内恋愛してみようとか、そんなこと考えたこともないし、この先も考えるつもりもない。
極端な話、仕事をしているのは給料をもらうためだけなのだ。
入社してすぐの頃は同僚に食事に誘われたこともあったが、断り続けるうちにもう声はかからなくなってしまった。別に寂しいと思わないし、むしろせいせいしていたのに。
なのに……この佐伯柊一だけは、なんだかんだと理由を付けて咲良を誘ってくるのだ。もう何度断ったか知れない。しかし、全然諦める気配がない。しかもそのお誘いがこのところ頻繁で、いちいちお断りするのにも骨が折れる。
構ってなど欲しくないのに、ひとりでいたいのに。やたら距離を縮めようとしてくる柊一が、咲良はとにかく苦手で仕方がなかった。
「うーん、まあ、嫌われてないようでよかったよ」
腕組みをし、隣のデスクにもたれかかるようにしている柊一が、曖昧な笑みを浮かべる。
……この人はどれだけ女子社員に好かれたら満足なんだろう。

眼鏡の奥からじっと柊一を見上げ、咲良は内心でそんなことを思った。
別に上司がチャラ男だったとしても、咲良には関係のないことなのだ。咲良にとって無害な人間であってくれさえいれば。
「あの、室長。仕事をしてもいいですか？」
そう言うが早いか、咲良はさっさと視線をモニターに戻した。これ以上は邪魔するなというオーラを、全身から放出する。
「……そうか、邪魔して悪かったな。早めに帰れよ」
「わかりました」
あなたのせいで、確実に帰る時間が数分遅くなりました。と思ったが、口にはしなかった。
わざわざそんなことを言って突っかかり、面倒なことになるのはごめんだから。口は災いのもと。なら、黙っていれば災いもないだろう。
視界の端っこに柊一が去っていくのが見えて、咲良はほっとした。
やっぱりひとりは落ち着く。
仕事をスムーズに進めるためには、完全に他人との関わりを絶つわけにはいかない。だから最低限の付き合いは心がけているが……あまり人と関わり合いたくない、というのが咲良の本心だ。

だって人は嘘をつくし、裏切る。咲良はそれを、嫌と言うほど知っているから……

残りの仕事はすぐに終わり、柊一が出て行ってから数分もせずに咲良も会社を後にする。そして外に出たところで、見覚えのある背中を見つけた。すらりと均整のとれたスマートな立ち姿は、企画室室長の佐伯柊一に違いない。その隣には、髪の長い女性……きっと社内の誰かだろうが、咲良にはよくわからなかった。

「室長に奢ってもらえるなんて嬉しいです」

「ああ、好きなものを食べるといい」

「本当ですかぁ」

妙に甘ったるい声が咲良の耳に届く。わずかに眉をひそめて、遠ざかっていく二つの背中を横目で眺めた。

――さすがチャラ男。そうやって私以外の素敵な女性に手を出していてくださいな。

心の中でそっと呟き、咲良は駅に向かって歩き出した。

「お疲れ様、みんなぎりぎりのスケジュールの中よく頑張ってくれた。今日は俺の奢りで飲みに行くぞ！」

柊一の一言に、会議室にいた面々はわっと歓声を上げ、顔を綻ばせた。

画像に色付けをしたことで思った以上に印象が変わり、二度目のアンケートではD案

が断トツで支持される結果となった。そして、その案に対してつい先程、上からのOKが下りた。まさに期限ギリギリだった。

咲良は出来上がったパッケージを手に取り、まじまじと眺める。

アンケートをし直すと言った柊一の判断は、正しかったとしか言いようがない。

最初に行ったアンケートの結果だけを受けてパッケージのデザインを進めていたら、きっと「無難なもの」しか出来なかったことだろう。

それにいち早く気付き、回避させた柊一の直感やひらめきのようなものを、咲良は素直に尊敬していた。データを読むのは得意でも、そういうものには無縁だったから。

「室長、どこに連れて行ってくれるんですか？」

「そうだな、日本酒の美味い店があるんだ。日本酒、いけるか？」

「もちろんですよー」

「室長の奢りだから、高い地酒でもご馳走になろうかな」

「ある程度は遠慮しろよ。次の給料日までカップラーメンの生活になる」

そんな楽しげな声が、聞く気はなくても耳に入ってくる。手にしていたパッケージをデスクの上に置き、咲良は盛り上がる面々を横目で見た。

その中心では柊一がメンバーに囲まれ、人懐っこい笑みを浮かべていた。そんな柊一を、誰もが信頼したような瞳で見ている。

彼は毎日誰よりも遅くまで仕事をしていた。口だけでなくしっかりと仕事をこなす姿を示しつつ、常にメンバーを気遣って、そのやる気を引き出してきたのも彼だった。柊一がそこにいるだけで、メンバーの顔つきが自然と引き締まる。

苦手だと思っても、咲良は柊一の仕事ぶりは評価している。理想の上司と言ってもいいくらいだ。

まあ、本人には絶対に、口が裂けても言うつもりはなかったが。

ふと視線を上げて時計を見れば、丁度定時を過ぎたところだった。会議も終わったことだし、帰宅しようと咲良は席を立つ。

「それじゃあ、お疲れさまでした」

今日は久々に早く上がれるし、帰ったらゆっくり読書でもしよう……そんなことを考えながら咲良はドアノブに手を伸ばす。けれど咲良がドアノブを掴む前に、それは阻まれてしまった。

咲良の細い手首が、横から伸びてきた大きな手にがっしりと掴まれる。

「待て」

咲良は内心でため息をつきつつ、声の主を見やる。

「室長、手を離していただけませんか？　仕事も終わりましたので帰宅します」

「飲みに行くって言ったんだが、聞こえてなかったか？」

あれだけ近くで大盛り上がりされたのだ。聞こえないわけがない。行く気がないから、帰宅しようとしただけだ。

「聞こえていましたが、私は遠慮させていただきますので」

どうぞ皆さんで楽しんできてください。そう言おうと思ったのに。柊一が不機嫌そうに片眉を跳ね上げ、咲良の手首を上に持ち上げた。そして他のメンバーに向かって声をかける。

「今回の企画がうまくいったのは紺野のおかげだと思うんだが、どう思う？」

「は？」

いきなりの柊一の行動に、咲良は思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。周囲の視線が自分の方に集まり、いたたまれない気持ちになる。注目されるのは苦手だ。

「そうだね。紺野さんが一日でアンケートを作り直してくれたのは大きいよね」

「最初にアンケートで好まれる色の傾向を調べるべきだ、って言い出したのも紺野さんだし」

「確かに今回の企画の功労者だね」

周囲から上がる声に、咲良は戸惑い口をぱくぱくさせるだけだ。

「て、わけだから、その功労者の紺野が飲みに来ないってわけにはいかないよな、みんな」

柊一の声に、他のメンバーも笑顔でうなずいている。

「そういうことだから、今日は顔を出しておいた方がいいと思うけど？　さすがにこの雰囲気で参加しなかったら、あまりにもイメージ悪いんじゃないか？」
にこにこしたさわやかな笑みを顔に貼り付けたまま、柊一は咲良にだけ聞こえるようにそっと耳打ちする。
はめられた！
そのことに気が付いた時にはもう遅かった。咲良はずるずると引きずられるようにして、飲み会の席へと連れて行かれてしまったのだった。

柊一がメンバーを引き連れて行ったのは、落ち着いた和風の居酒屋だった。
珍しい地酒も多数置いてあり、お酒も料理もかなり美味しい。柊一は店長とも親しいようで、特に注文をした様子もないのに、次々と料理が運ばれてくる。
咲良はテーブルの端っこに座った。無理やり連れてこられたとは言ってもせっかくの奢りなので、ありがたく食事を口にする。
居酒屋に着いてから小一時間ほど経つと、程よくアルコールも入っていることもあって、皆楽しそうに盛り上がっている。
「へえー。紺野さんって日本酒とか飲むんだ。意外ー」
「……そうですか？」

「うん。何となく焼酎とかロックで飲んでそうっ」
――それ、どんなイメージなんだろう……
横できゃいきゃいはしゃいでいる先輩の庄司愛実に適当に相槌を打ちながら、咲良は内心で小さくため息をついていた。
できればひとりでゆっくり食事をし、日本酒を楽しみたいところだった。しかし、普段飲み会の席にやって来ない咲良を珍しがって、入れ替わり立ち替わり企画室のメンバーがやって来る。しかも。
「今日はどうせ佐伯室長の奢りなんだから、じゃんじゃん飲んじゃおうよ。冷酒追加お願いしまーす」
「えっ、いや、あの、もう……」
「ほらほら、カンパーイ」
「は、はあ……」
咲良の声など、どうも耳に入っていないらしく、さっさと冷酒が追加注文されてしまった。既に咲良の前には三本ほど手つかずのものがあるというのに……
彼女が来る前にも数人の同僚がやってきて、咲良が冷酒を飲んでいるのを見ると、勝手に追加注文をしていたのだった。多分、アルコールを飲んでいる姿を滅多に晒さない咲良が酔ったらどうなるか、面白がっているに違いない。

それでも食べ物のありがたみを痛感しながら育った咲良としては、目の前にあるお酒を残すわけにもいかず、ちびちび飲み進めていたのだ。

「じゃ、たくさん飲むのよ～」

乾杯したことで気が済んだのか、愛実はふらふらした足取りで立ち上がると去っていった。どうやら愛実もまた、すっかり酔っ払っているらしい。仲の良い同僚たちのもとへと戻り、楽しそうな笑い声を上げている。

そんな光景を横目で見ながら、咲良は息をついた。周囲の気遣いもわかってはいるが、ひとりでゆっくり楽しむ方が性に合っている。

ほっとしたのも束の間、咲良はきょろきょろと周囲を窺った。いつもだったら過剰なほど咲良にちょっかいをかけてくる柊一の姿が見当たらないのだ。普段は人の集まるその中心を探せば、簡単に見つかるというのに、今はその姿はどこにもない。

――まあ、いないならいないで私は構わないけど……

そんなことを考えながら、咲良は立ち上がって座敷を出た。もちろん、柊一を探すためではない。間違っても絶対に、ない。

ただ勧められたお酒をたくさん飲んでしまったので、化粧室に立ったまでのこと。

多少ふらつく足取りで化粧室と表示されている細い通路を歩いて行くと、その奥から聞き覚えのある声がして咲良は思わず足を止めた。

「ねえ、このまま抜け出してふたりきりになろうよ」

「……いや、だから悪いんだけど人違いだ。それに俺には連れもいるし」

「ひどい！　また他の女に手を出したのね！　この浮気者っ！」

聞こえてきたのは紛れもなく佐伯柊一の声だ。もう一方は、甘ったるい女の声。女の方は、どうやらすっかり酔いが回っているようだ。その修羅場真っ最中ともとれるやりとりに好奇心が湧き、咲良は通路の角に身を隠してふたりの姿を盗み見た。

角を曲がった先に男性用と女性用の化粧室のドアが並んでおり、その前で柊一は緩いウェーブの髪の女と話しているらしい。どうやら企画室の女性ではなさそうだ。

その女性は柊一にしなだれかかるようにして、身を寄せている。

「いいわ。一度くらい許してあげる。だから……ねえ、ふたりで抜け出そう？」

「だからたぶん……いや、絶対に人違いだ。第一初対面だ」

「そんなこと言わないで。ね？　どっか行こうよ」

「だから……」

女性のペースに押され、すっかり困惑している柊一など、滅多にお目にかかれるものではない。会話の内容から察するに、どうやらこの酔った女性が、柊一のことを誰かと――彼氏なのか知り合いなのかは知らないが――勘違いしているようだ。

「私じゃ……駄目？」

いや、本当に勘違いしているのかどうかわかったものではない。柊一ほど人目を引く顔ならば、酔ったフリで逆ナンされる可能性だってあるだろう。

この先の展開が気にならないわけではない。けれど覗き見をしているのがばれてしまったら、その方が面倒くさいことになりそうで、咲良はその場を離れることにした。

確か店の化粧室はここ一か所のはず。ならば一度外に出て、コンビニにでも行ってこよう……と、咲良は踵を返した。酔っ払っている自覚は全くなかったが、それでもいつもより飲んでいるせいか、足下が一瞬ふらついてしまった。

あっと思った時には、近くにあったビール台につまずいていた。派手な音が周囲に響く。おそるおそる振り返ると、柊一と真っ直ぐ視線が交わってしまった。

「紺野っ」

慌ててその場を立ち去ろうとした咲良だったが、再びビール台にけつまずき、今度は無様に床に這いつくばってしまった。

「紺野！　お前、大丈夫か？　あーあ、派手にすっ転んだな。痛くないか？」

すぐに駆け寄ってきた柊一が、咲良の腕を引いて起こしてくれる。そしてその場に咲良を立たせると、自分はしゃがみ込んで服についた埃を払い始めた。

「だ、大丈夫です。そんなこと、自分でできますから」

咲良は飛び退くように柊一から離れると、スカートについた埃を払った。子供でもな

いのにそんなことをされるなんて、恥ずかしいことこの上ない。

「可愛くない。こういう時は大人しくしておくべきだ」

「結構です。自分のことは自分でしますから」

「ちょっとぉ、あんた誰よ」

声と共に割って入ってきた女性が、柊一の腕に絡みつく。睨み付けるようなきつい視線に、咲良はつい先ほど、自分がさっさとここから立ち去ろうとしていたことを思い出した。

巻き込まれることは避けたかったのに、どうやらもう遅いらしい。自分のせいなので文句の言いようもないが、とにかくこの場から離れようと咲良は考えた。

けれど。

「ああ、悪いね。こいつは俺の連れなんだ」

「は？」

咲良と女性の声が重なる。柊一は腕に絡みつく女性の体を引きはがすと、傍らに突っ立っていた咲良の肩を親しげに抱いた。

確かに連れという表現は間違っていない。他のメンバーと共にここに連れてきてもらったのだから。けれどこの状態で柊一の口から出た「連れ」の意味は、そういう一般的な意味ではなさそうだ。

柊一の意図を測り兼ねていると、彼に引きはがされてしまった女性が、じろじろと頭のてっぺんからつま先まで咲良を観察し始める。その視線があまりにも不躾で、咲良は少しむっとして眼鏡の奥から女性を睨み付けた。

「連れ？　この子が？　この、ちんちくりんでだっさい子がぁ？」

突然女性の口から出た失礼極まりない言葉に、柊一は呆気にとられている。一方の咲良は、あり得ない言葉に、すっかり冷静になった。

柊一の腕を払い退け、ずいっと一歩踏み出し、真っ直ぐに女性を見上げる。言われっぱなしではあまりにも癪だ。

「残念ながら私はこちらの男性とは、全く特別な関係ではありません」

「あら、そうなの？」

咲良の言葉に女性は目を瞬かせる。その口調はさっきまでと違いシラフそのものだ。やはり酔った振りをしていたに違いない。

「はい。会社の仲間と一緒に来ていますので。けれど……そのただの仕事仲間の、ちんちくりんでだっさい女に助けを求めたくなるほど、あなたのお誘いは迷惑だってことはご理解いただけるでしょうか？」

「なっ!!」

「ご理解いただけますよね？」

「……っ、な、何なのっ、この失礼な女っ!!」

「失礼なのはお互い様です。無自覚な分、あなたの方がよほど失礼です」

その言葉に、女性はかっとして咲良に掴みかかろうとしてきた。けれど、柊一がかばうように女性の前に立ちはだかって、そして――

「ぶ……っ、ははは っ、あー……、お前って本当に面白いな、紺野」

柊一が、心底おかしそうに笑い出す。その目にはうっすら涙まで浮かんでいる始末。

「室長、泣くほど笑わないでください。あなたが一番失礼です」

「わ、悪い。マジで悪い。でも……ぶぶっ、お前、最高だわ」

「……あなたは最低です」

せっかく助け船を出してあげたというのに、こうも笑われてはさすがに気分が悪い。いや、助け船を出したつもりは実のところなかった。初対面の女性に「ちんちくりん」だの「だっさい」だの言われて、さすがに言い返したくなっただけだ。

……まあ、「ちんちくりん」も「だっさい」も事実なのだけど。

「これ以上巻き込まれるのは迷惑ですので、私はこれで失礼します」

色々なことが面倒になり、咲良は大きなため息をつく。そしてぺこりと頭を下げるとさっさと踵を返して歩き出した。

「紺野、ちょっと待て」

「後の処理はご自分でどうぞ」
後ろから追いかけてくる柊一を一瞥し、咲良はそう言い放つ。
「ああ、わかった。……というわけだから、申し訳ないんだけど、俺の『個人的に特別な』連れの方が言うまでもなく大事だから、失礼するよ」
後方から柊一のそんな声が聞こえてくる。……何だか変なことを言っていたような気がするけれど、気にしない。大体、柊一はいつだって咲良にとっては「変な人」なのだから。
すっかり化粧室に行く気もなくなってしまい、咲良はそのままメンバーのいる座敷に戻った。やたらと冷酒が集まっている自分の場所に戻ると、その場に座り込む。
「いや、悪かったな」
一息つく暇もなく、隣にどかりと柊一が座った。
「……別に構いません。あの女性はいいんですか？」
美人だったから、もったいなかったのではないかと思っただけなのに、柊一は目を瞬かせながら咲良の顔を覗き込んでくる。
「気になるか？　妬いたか？」
どうしてそういうおめでたい思考回路になるのだろうかと思いつつ、咲良はテーブルの上の冷酒に手を伸ばす。
「……いいえ。それは一切ありませんので。どこをどう解釈したらそういう疑問が生まれるのか本当に謎です」

「……お前なあ……さすがサイボーグは言うことが違うな」
呆れたようにそう言う柊一を、咲良は横目で睨み付けた。
サイボーグは、咲良のあだ名だ。とは言っても、陰でそう呼ばれているだけで、面と向かってサイボーグと言われたのはさすがに初めてだった。
無表情で、無感動で、機械的で、仕事人間だから多分そう呼ばれているのだろう。他に理由があるとしても咲良の知るところではないし、別に知らなくてもいい。
「あれ？　もしかして気にしてたのか？」
「いいえ。別に構いません」
表情を変えずに冷酒をすする咲良に、柊一の方が顔をしかめる。
「少しは気にしたらどうだ？　せっかく一緒に仕事してるんだから、コミュニケーションを図れている方が、仕事はしやすいと思うぞ？」
「……そうかもしれませんね」
とは言ってみたが、人には向き不向きがあるんだと咲良は内心で思った。
柊一のように、人と上手く関わりながら信頼関係を築いていけるタイプの人間もいるだろうし、人と関わろうとすればかえってこじれるタイプもいる。自分は絶対に後者だと咲良は思っていた。かといって、口で説明したところでわかってもらえる自信はない

し、上手く言える自信もない。だから咲良は黙ったままでお酒を口に運んだ。
「……何か言いたいことあるんじゃないのか？」
柊一が見透かすような目で見つめてくる。そう、この「見透かすような目」。これも彼が苦手な理由のひとつだった。
あえて心の中で思っていることを口にしないでいるのに、柊一はそんな思いを見透かすような目をする。見透かす……というよりも、探ろうとしているような。
「……いいえ」
ぶっきらぼうにそう答えると、柊一は仰々しいため息をついた。
「……俺はさ、聞きたいんだけどな。お前が本当は何を考えてるのか」
「お聞かせするほど崇高な思想はありません」
「それでも別に構わないけど」
柊一はそう言うと、グラスを持ち上げる。そして、有無も言わさず咲良の手にしているグラスにカチンと合わせた。
「くだらなくてもいい。お前の思ってること言ってみろよ」
その微笑みは優しくて、あたたかで。きっと誰の心をも簡単に溶かすのだ。……咲良以外の。
「……ひとりでゆっくり飲みたいです」

ぴきっと、一瞬柊一が固まる。こめかみに青筋。
「――聞こえない。よし、今日は飲むぞ。ほら飲め。上司の勧める酒が飲めないとは言わせないからな」
「パワハラですよ、室長」
「大人しく飲まされておけ」
こめかみをひくひくさせながら、柊一が咲良のグラスに冷酒をどんどん注いでくる。放っておくと零れてしまいそうな勢いだ。仕方なく咲良は勧められるままに杯を重ねていく。
そのうちに、最近味わったことのないような浮遊感を覚え、ああ、自分は酔っ払ったんだな、と思った。
けれどそのことに気が付いた時には、もう既に泥酔一歩手前だった。
目が覚めた瞬間、咲良はひどい頭痛に苛まれて、開きかけた瞼を再び固く閉ざした。薄い瞼越しに光を感じる。人工の光ではない、それは太陽の光。
――太陽の光？
そのことに気が付いて、咲良は混乱した。布団に入って眠った覚えはない。重たい瞼をこじ開けると、視界に見慣れない部屋が映った。見慣れない、じゃない。見たことも

ない、だ。

何か考えるよりも先に、咲良は勢いよく身を起こした。その途端、頭が割れるように痛み、片手で頭を支えてしばし悶絶する。

そして、はらりと体から滑り落ちた布団の下から現れた自分の体に、今度は目を見開いた。慌ててずり落ちてしまったタオルケットを引っ張り上げる。

「これは……一体」

そうしてこわごわとタオルケットをめくり、その下を覗き込む。

――裸だった。真っ裸。下着も何も身に着けていない、全裸。

自分に何が起こったのかと思いを巡らせるよりも早く、視界の端っこで盛り上がった布団がもぞりと動くのを見た。その布団から腕が伸び、布団が除けられた。そこから姿を現したのは……佐伯柊一だった。しかも、彼の上半身は裸だ。

予想外の展開に、冗談じゃなく心臓が止まるかと思った。

下半身は布団の下なので未確認だが、自分が下着さえ身に着けていない事実を考えると、彼も同じであろうことは簡単に予想出来る。

そして、自分と彼との間に何があったのか、それも簡単に予想出来た。

裸の男女が同じベッドで眠っているのだ。「何があったかわかりません」とか「何もなかったに決まってる」とか、往生際の悪いことを考えるつもりはない。

まあ、つまりはしてしまったのだろう……セックスを。初体験ではないのが救いだ。

事実は事実として受け入れなくてはいけない。だからどうしてこうなったのか、咲良は昨夜何があったのか思い出そうと、痛む頭を必死にフル回転させた。

会社のメンバーと企画の打ち上げで居酒屋へ行き、そこでみんなに冷酒を勧められ、柊一が逆ナンされているのを見付け、流れで巻き込まれて嫌な思いをして、それから……？

座敷に戻って柊一が無理矢理乾杯してきた辺りまでは、はっきりとした記憶が残っている。けれどその後は何だか繋がらない、夢なんだか現実なんだかわからないような細切れの記憶ばかりだ。

咲良は重々しいため息を吐き出しつつ、部屋の中を見回す。

アイボリーとブラウンを基調とした部屋の中は、どうやらホテルの一室というわけではなさそうだ。だとするとここは柊一の部屋なのだろう。咲良の小さな部屋とは比べ物にならないほどベッドルームは広く、置いてある家具も落ち着いていて高級感がある。

さすがは次期社長の寝室。

と、いらぬ感心をしてしまう。

咲良はベッド脇に自分の黒ぶち眼鏡を見付け、それをかける。眼鏡をかけたことで、幾分ほっとした。レンズ越しに物事を見れば、何だか冷静な判断ができそうな気がして

くるのだ。

ついでに床にバラバラに脱ぎ散らかされた自分の服も見付け、咲良はそうっと布団を抜け出して、それを拾い集めた。

服を一枚ずつ身に着けながら、どうしたものかと考えを巡らす。

けれどしっかり全ての服を身に着け終わったところで、そんなことを考えること自体ばかばかしいのだと気が付いた。

そう、どうしようなんて考える必要もない。だってお互いに酔っていたのだ。どちらか一方が悪かったということにはならないだろう。

責任能力のないふたりが、訳もわからずに本能のままについつい、いたしてしまっただけなのだ。きっと柊一も目が覚めたら失敗したと後悔するに決まっている。だとしたら、最初から何もなかったことにすればお互いにハッピーではないか。

たどり着いた結論に、咲良はひとり大いに満足していた。

くるりと振り返り、さっきまで自分が眠りこけていたベッドに目をやる。柊一はまだ静かな寝息を立てていた。

このまま何も言わずに帰ってしまおうかとも考えた。けれど、お互いに何もなかったことにしましょうという確認がとれないまま帰るのは危険な気がしたし、それに……少なくとも記憶がないほどに泥酔(でいすい)した咲良をここまで運ぶのは相当に骨が折れたに違いな

い。放って帰られていたら、咲良は今頃もっとひどい現実に突き落とされていた可能性だってあるのだ。

だから、一言謝罪とお礼を言うべきだろう。

咲良は手を伸ばすと、眠っている柊一の肩をゆすりながら声をかけた。

「室長、佐伯室長」

「……ん？　ああ……おはよう」

柊一は薄く目を開けて咲良を見ると、大きな欠伸(あくび)を噛み殺す。

「おはようございます」

「あれ……お前、もう服着てるのか？　それより何時だよ……って、まだ五時じゃねーか、早すぎるだろ」

柊一は枕元の電子時計に目をやって時刻を確認すると、再びもそもそと布団の中にもぐり出す。そして片手だけ布団から出すと、咲良に向かって手招きをした。

「……何ですか？」

「んー？　まだ早いから、もう少し寝よう。だから、ほら、紺野も布団に入れよ」

ひょこりと顔を出して笑みを向けてくる柊一に、咲良は思わずぽかんと口を開けてしまった。言っている意味がまったくもって理解不能だ。

酔った勢いで一夜を共にしただけであって、仲良く二度寝する仲では絶対にない。

「……いえ、結構です」
真顔で首を振ると、にっこりと微笑んでいた柊一の目が不満げに細められた。
「どうして」
彼の言葉に、咲良は思い切り眉をひそめた。ここは断るのが当然だと思う……というか、そもそもその誘い自体がおかしい。
「室長と同じ布団で二度寝する意味がわかりません」
「昨日は一緒に寝たんだし、二度寝くらいどうってことはないだろ？」
確かに昨日しただろうことを考えれば、同じ布団で二度寝くらい大きな問題ではないだろう。けれど。
「昨夜のことはまったく覚えておりません。でも……状況から考えると、酔った勢いで室長とどうにかなってしまったというのは間違いないかと思うのですが、いかがですか？」
本当のところを確かめるべく、咲良はそう柊一に問いかけた。真相が曖昧なままなんて気持ちが悪いし、それに真実がどうだったとして、「酔った上での過ち」という認識は変わりようもない。
だから柊一が「やったよ」と、あっさりきっぱり簡潔に答えても、それほどショックは受けなかった。ただこれで自分もチャラ男の輝かしい女性遍歴のひとりにされてしまったかと思うと、それはちょっとショックだったが。
けれど、どうしようもない。こうなってしまったのは、正体をなくすまで飲んでしまった自分のせいなのだから。身から出た錆だ。
抜け落ちた記憶が柊一の言葉によって補完され、どこかすっきりとさえした。
「やはりそうでしたか。いえ、予想通りです」
「ご理解いただけて嬉しいよ。それじゃあ、二度寝するか」
柊一は満足げに微笑むと、ここにどうぞとばかりに自分の横を手の平で叩く。
そんな柊一に咲良は思わず首をひねった。理解したとは言ったが、だからと言って柊一と仲良く寝床に入る気なんてさらさらない。
「ですから、結構です。室長との間に何があったかは理解しましたが、酔った勢い、しかも酔っ払い同士の過ちじゃないですか。忘れましょう」
「酔った勢い？」
咲良の言葉に柊一はむっとした声を出し、体を起こしてベッドの上で胡坐をかいた。
睨むような視線は、まるで咲良を責めているみたいだ。
「……昨日のことは、酔っ払い同士の勢いってことか？」
「それ以外に何があるって言うんですか？」
思ったままをシンプルに答えると、柊一は大きなため息をつきながら、片手で自分の

髪の毛をわしゃわしゃと掻き混ぜた。その動作は、どことなく苛ついているようにさえ見える。

「酔った勢いでということは、お互いに責任能力がなかったと見なされるのが妥当かと思います。責任能力のない者は罪に問われないのが世の常です。ですから、昨夜は何もなかったという認識でいいですね、室長」

柊一はぐしゃぐしゃに乱れた前髪の隙間から、睨み付けるような視線を咲良に送り、それから再び深々とため息をついた。

「あー……そうくるか、さすがだ。手ごわい」

「何ですか？」

「いいや、お前は俺の想像の斜め上を行ってるって言っただけだ」

「は？」

「まあ、これくらいの方が楽しみはある」

「何のお話ですか？」

「いや、お前はわからなくていいよ」

乱れた髪を掻き上げ、にやりと笑ったその顔は、いつも会社で見せる強気な柊一の表情に戻っていた。

何やらひとり納得したような柊一を見ながら、咲良はまだ自分が謝罪もお礼もしていなかったことを思い出し、慌てて頭を下げる。

「あとそれと……昨夜はご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。泥酔した人間をここまで運んでくるのは本当に大変だったと思います。さすがに外に放置されていたら、どうなっていたかわかりません。ありがとうございました」

愛想はないが、これでも礼儀は持ち合わせているつもりだ。

柊一のおかげで持ち物を紛失することもなかったし、風邪も引かずに済んだ。

……体のことに関しては、まあ、覚えてないし減るものでもないのでよしとする。

「では、これ以上ご迷惑をおかけできませんので、私は失礼します」

目を瞬かせて咲良を見ている柊一を一瞥し、もう一度頭を下げる。そしてくるりと踵を返すとさっさとドアに向かって歩き出した。

「いや、ちょっと待て」

ドアノブに指が触れたところで、背中に柊一の声がぶつかり、咲良はゆっくり振り返る。

「何でしょうか？」

小首を傾げて柊一を見ると、彼は明らかに苦り切った表情をしていた。

「何でしょうかって、お前……」

そう呻くように言った柊一の顔は、もしかしたら落胆した表情、という方が正しいのかもしれない。だが咲良には、どうして柊一がそんな顔をしているのかわからなかった。

酔った勢いでやってしまった相手が、すんなりとお詫びとお礼を口にして帰ろうとしているのだ。むしろ、「うん、じゃあな」とほっとした表情で見送られるとばかり思っていたのに。

「あの、何もないようでしたら私は失礼させ――」

「だからちょっと待てって」

咲良の言葉を遮るように柊一は言葉を発すると、ベッドからがばっと立ち上がった。もちろん裸なので、色んなところが丸見えだ。

別に男の人の裸を見たから動揺した、というわけではないが、さすがにじろじろ見るのも失礼な気がして、咲良はさっと目をそらす。

「別に見てもいいんだぞ？　俺だって昨日、お前の裸はしっかり見たんだから。思ったよりは胸があるんだな。まあ、俺は巨乳フェチじゃないからそれくらいで十分だ」

その意地悪そうな口調からは、咲良をからかって困らせようとしている魂胆が見え見えだ。けれどもう見せることもないのだから気にしない。

ただ、柊一の裸を見ることを恥ずかしがって目をそらせたのだと思われるのは癪なので、咲良は視線を真っ直ぐに柊一に向けた。

頭のてっぺんから足の先まで舐めるように眺める。

「はい、私もしっかり室長の裸を見せていただきました。これでお互い様です」

そんな咲良の言葉に、柊一は目を見開き、それから深々とため息をつく。

「あー……どうしてお前はそうなんだろうね。可愛げがない。恥ずかしがらずに直視されたら、こっちの方が恥ずかしいだろうが……」

ぶつぶつと文句を言いながら、柊一はクローゼットからTシャツとハーフパンツを引っ張り出してそれを身に着ける。

一応「待て」と言われていたので、大人しく待っていた咲良は、柊一が着替え終わったのを見計らって再び口を開く。

「それで室長、待てということでしたが、何ですか？」

「コーヒーを淹れてくる。だから待ってろ」

「は？」

柊一の口から出た予想外の言葉に、咲良は思い切り首を傾げる。

「美味いコーヒーを手に入れたんだ。だから待ってろ」

さわやかな笑みを向けられて、咲良はますます困惑した。

「あの……私、別にコーヒーは結構ですので、このまま帰らせ」

「待ってろ、って言ってるんだ」

再び柊一は咲良の言葉を遮って語気を強める。ドアの前で突っ立ったままの咲良に大股で近づくと、説き伏せるように人差し指を突き付けた。

「いいか、コーヒーを淹れてくる。待ってろよ。命令だ、いいな」
有無を言わせない柊一の迫力に、咲良は思わず怯んでしまう。いつもは優しげな瞳の中に、強い光が宿っている。どうしてこんなにも強く引き止められるのだろう……と、咲良は戸惑いを隠せない。
「あの」
「待っていろ」
「……はい」
どうやら咲良に選択肢はないらしい。それに言い争っても無駄ならば、大人しくコーヒーをご馳走になった方が賢い。
「よし、じゃあすぐに戻ってくるからな」
柊一は満足げにうなずくと、部屋から出て行く。目の前でバタンとドアが閉まり、咲良は再び首を傾げた。
柊一が何を考えているのか、さっぱり理解不能だ。
それでもうなずいてしまった手前部屋から出るわけにもいかず、咲良は室内をふらふらと歩いた。けれど結局することもないので、窓際に立って外を眺める。
数分後、マグカップをふたつ手に持った柊一が部屋に戻ってきた。
「よろしい、ちゃんと待ってたな」

戻ってきて咲良の顔を見るなりのその一言に、思わずむっと口元が歪む。
「室長が待っていろと言ったので待っていたんです」
「ああ、そうだったな。でも紺野だったら、俺がいなくなった途端にこの部屋から逃走を図るんじゃないかって気がしたもんだから」
「逃走って……ここはそんなに危険な場所なんですか？」
思わず出てしまった言葉に、柊一が「くくっ」と面白そうに笑う。
「俺としてはそれほど危険な場所だという認識はないけど、もしかしたら紺野にとってはこれ以上ないほど危険な場所になるかもしれないな」
「……どういう意味でしょうか？」
「ほら、この部屋は防音もしっかりしてるし、俺がその気になったらいくらでも、どんなことでも、好きに出来るってことさ。な？　危険そうだろ？」
にやりと細められた瞳に、咲良は身の危険を感じてじりっと後ずさった。済んでしまったことは仕方ないとしても、シラフの状態でもう一度……だなんて勘弁してほしい。
警戒心も露わに柊一を睨み付けると、彼は堪え切れないとばかりに噴き出した。
「しないよ、そんなこと。さすがにそれは犯罪だ。これ以上紺野に嫌われたくもないしな。うん、でも、無表情で無反応よりも、警戒された方が男として認識されている感じがして、俺としては嫌ではない」

屈託なく笑っている柊一を見て、咲良は呆れて肩の力を抜いた。完全にからかわれているようだ。
「性格悪いですね」
「なんとでも」
直球で嫌味をぶつけたのに、柊一は怒ることもなく笑ったままだ。そして手に持っていたマグカップを咲良に向かって差し出してきた。
「ほら。美味いから飲めよ」
すっかりからかわれ、嫌味もスルーされ、何だか悔しくて咲良はマグカップを素直に受け取ることが出来ない。
「ん、ほら。せっかくお前のために淹れてきたんだから」
だが優しい笑みでそんなことを言われてしまうと、さすがに受け取らないわけにはいかない。咲良は「ありがとうございます」と小さく言って、そのマグカップに手を伸ばした。
「飲んでみ」
勧められるままにコーヒーを口に含むと、普段飲んでいるインスタントコーヒーとは比べ物にならないほど芳醇な味わいが口の中に広がった。
「……美味しい」
「そうだろう？　なあ、紺野、ここに来たらいつでも美味いコーヒー飲ませてやるぞ？」

またここに来いと誘っているかのようなその言葉に、咲良は戸惑った。
「……餌付けされるつもりはありません」
「うん、まあ予想の範囲内の返答だな」
柊一は肩を竦め、それから真っ直ぐに咲良を見据えた。真剣そのものの瞳に射貫かれ、咲良は一瞬呼吸さえ忘れてしまいそうになる。
「な、何ですか？」
そんな真剣な瞳で男の人から見つめられたことのない咲良は、少しだけ怖くなった。
「紺野、俺と付き合わないか？　って言うか、付き合え」
「……は？」
たっぷり時間をかけた割には、相当間抜けな声が出たと思う。
「だから、俺と付き合えって言ってるんだ」
追い打ちをかけるようにそう言って、尚も真剣に見つめてくる柊一の言葉の意味を理解した時、咲良はあまりの驚愕に完全に固まってしまった。
「やっちまったんだし、別に構わないだろ？」
「む、無理です」
動揺と驚きと困惑と……様々な感情がごちゃまぜになってしまったが、なんとかいつもの調子でそれだけ答えた。

「からかわないでください」
プライベートで話したことだってほとんどないし、仕事ではいつもぶつかっているし、疎まれている自信はあっても付き合ってくれと言われるようなことをした覚えはない。性質の悪い冗談だ。
「からかっているつもりはないよ。そのつもりで昨日、ここに連れてきたんだから」
「……は？」
「酔い潰れてる紺野を見た時は、ラッキーだと思ったね。そんなふうにでもならなければ、お前とふたりになるなんてなかっただろうし」
「……何を」
「何度誘ってもあっさり断られるし、これくらいしないとお前、これからも逃げ続けるだろ？」
「つまり……室長は、これはラッキーとばかりに泥酔した私をお持ち帰りしたってことですか？」
「正解」
柊一の答えに、思わず絶句する。
まさか、昨夜の一件がただの酔った勢いではなかっただなんて。咲良にとっては酔った勢いの方がどれだけありがたかったことか。そうだったのなら、今こんなわけのわか

らない事態に巻き込まれずにすんでいたのに。
「ってことだから、付き合え」
「全力でお断りします」
間髪いれず、咲良はばっさり切り捨てる。
「どうして？　俺はかなりのお買い得物件だと思うけど。損はさせない」
確かに柊一はお買い得物件に違いない。次期社長の座は決まっているようなものなのだし、見かけだって標準のかなり上を行っているのだから。けれど、どんなイケメンのお買い得物件でも、咲良の心には残念ながら響かない。
「申し訳ありませんが、興味ありませんので」
「興味ないって、男に興味がないってこと？」
柊一の問いかけに、咲良は大きくうなずく。
「はい、全く興味ございません。ちなみにですが、だからと言って女性が好きというわけでもありません。至ってノーマルです」
「だったらどうして」
「男は裏切ります。男に人生を振り回されるなんてごめんこうむります」
思わず言葉に力がこもってしまった。拳まで握って力説した咲良を、柊一が一瞬ぽかんとした表情で見つめる。

「あの、さ。その年で、男にひどい目にあわされでもした？」
「いえ、ごく身近に男に振り回されっぱなしの、とても悪い手本のような人がいましたので、自分はそうはなりたくないと心から思っているだけです」
脳裏に自分とよく似た顔がぼんやりと浮かぶ。もう数年間も顔を合わせていない母親の……あの人のようにはならないと、遠い昔から心に誓っているのだ。
だから人一倍勉強もしたし、仕事でも努力している。貯金もそうだ。
「バリバリ仕事して、しっかりお金を貯めて、ゆくゆくは環境のいい老人ホームでのんびり余生を楽しむのが私の目標です」
胸を張って持論を展開してみせたが、柊一は呆れ顔でため息をついている。
「……それがお前のライフプラン？」
「そうです」
「それってちょっと寂しいかも……なんて、考えたことは？」
「ありません」
と、咲良は自信満々に答えた。
そう、寂しいなんてあるはずもない。ひとりには慣れている。それにひとりでいるのは楽チンだ。誰かに裏切られ苦しんだり、孤独に怯えることもない。自由気ままに余生を楽しむことのどこが寂しいというのか。

ここまではっきりと答えたのだから、さっさと前言を撤回してくれないかと思ったが、柊一は顎に手を当てて何やらうんうんとうなずいている。そして、妙に納得した顔で再び咲良を見た。
「やっぱり俺と付き合うべきだ。きっとひとりよりふたりの方がいいって理解するはずだ」
「あの」
これ以上、柊一と問答していても埒が明かない気がして、咲良はマグカップを置くと立ち上がった。大人しくコーヒーもご馳走になったし、もう帰っても失礼には当たらないだろう。
「コーヒー、ご馳走様でした。とっても美味しかったです」
完全に話をぶった切り、咲良はぺこりと頭を下げる。そしてドアに向かって足を進めたのだが、進路を塞ぐように長い腕が横から伸びてきた。そしてドアと咲良の間に、柊一が割り込んだ。
「まだ話は終わってない。いい加減にしないと今すぐ襲うぞ」
そう言われても、咲良の中ではすっかり終わった話だ。
「何を言われたところで、私の気持ちは変わりませんが」
「変わらない？　何をしても絶対に？」

「絶対です」
自信を持って答えると、さすがの柊一も俯いて大きくため息をついた。これでわかってもらえただろう。そう思ったものの、彼は咲良の前に立ちふさがったままで、部屋から出してくれそうな気配はない。
「あの室長。そろそろ帰して――」
「よし、じゃあこうしよう」
またしても咲良の言葉を遮って、柊一が声を上げる。顔を上げ、真っ直ぐに見つめてくるその表情には、なぜか余裕ともとれる笑みが浮かんでいた。
「賭けをしないか？」
「賭け？」
柊一の口から出てきた言葉に、咲良は顔をしかめる。
「そう、賭け……ってよりも、そうだな、ゲームって言ったらいいかもな。簡単なゲームだよ。二か月間でお前が俺に惚れたら負け、惚れなかったら勝ち。どうだ、至ってシンプルだろ？」
「……意味がわからないんですが」
「お前が勝ったら、俺は二度とこんなふうに迫ったりしない。その代わり、俺が勝ったら……その時は付き合ってもらう。どうだ？」

どうだ、と言われても、あまりにも突拍子のない提案になんと答えていいのかわからない。だいたい、そんなことをして柊一になんの利点があるのか全く理解出来ないのだ。……からかって焦る咲良を見てみたいとか？　それとも柊一に全くなびかない咲良を落としたい、という妙な男のプライドとか？　――だとしても、やはり理解に苦しむ。
黙っていると、柊一はさらに挑発するかのように、咲良を見下ろしてきた。
「……それとも、自信がないからこのゲームはしたくない、とか？」
「まさか」
つい、咄嗟に反論してしまった。反論してから、柊一の挑発に乗ってしまったことに気付く。こんなにはっきりと答えてしまっては、後に引けなくなってしまう。というか、後に引けないように柊一に誘導されている気がする。
「だったら構わないな？　紺野には自信があるんだから、こんなゲームくらい、なんてことはないだろ？」
いや、誘導されたのだ。
さすがにここまで言われて、断れるはずがない。もし断れば、柊一を好きになるかもしれないと言っているのと同じになってしまう。
落ち着け、と咲良は自分に言い聞かせる。
そう、決して咲良にとって不利な条件ではないのだから。たった二か月我慢すれば、

咲良はもう柊一とかかわらずに済む。会社での今後の平穏な生活、ひいては咲良が望むライフプランの実現が保証されるのだ。大きく深呼吸をし、咲良はぐっと柊一を見据えた。
「約束していただけますか？」
「何を？」
「私が勝ったら、もう放っておいてくれますね？」
咲良の言葉に、柊一はにっこりと微笑む。
「ああ、もちろんだよ。その代わり……紺野も約束しろよ？　俺が勝ったら、俺と付き合ってお前の今後のライフプランは俺の好きに変えさせてもらうからな」
何だか話が大袈裟になっている。しかも口元は微笑んでいるくせに、目がちっとも笑っていない。本気で自分と付き合いたいと思っているのかと、錯覚しそうになる。
けれど、百戦錬磨のチャラ男であろう柊一のこと、女をその気にさせるのなんてお手の物なのだろう。どんな目的があるのか知らないが、騙されないぞ、と咲良は気を引き締める。それに咲良が負けるなど、天地がひっくりかえってもあり得ない話だ。
「負けるなんてあり得ません。いっそ、来世も差し出しましょうか？」
「へえ、それはいいね。是非そうしてもらおうか」
「ええ。万が一負けた時には、現世も来世も謹んで差し出させていただきます。室長に惚れるなんてこと、絶対にあり得ませんから」

そう、絶対に。
「絶対に、なんて言われると、かえって燃えてくるもんだな」
自信ありげな柊一に怯んでしまいそうになるが、咲良だって自信はある。負けるわけがない。
「環境の良い老人ホームでゆったりとした余生を過ごす」という輝かしい夢を必ず叶えるのだ。
「じゃ、いいね？　ゲーム開始だ」
「望むところです」
ばちばちとふたりの視線の間に火花が散った……気がした。
こうして咲良は訳のわからないゲームのただ中に、まんまと放りこまれてしまったのだった。

2　招かれざる同居人

土日に降り続いていた雨が嘘のように上がり、空は晴れ渡っている。普段ならば気持ちのいい青空だと思うに違いない。けれど今日の咲良には、その澄んだ青空を堪能する心の余裕はなかった。

一見パソコン画面に目を向けているようでありながら、咲良の視線は実はほとんどモニターを見てはいなかった。厚い前髪と眼鏡で隠した視線の先にあるのは、佐伯柊一の姿。

てきぱきと仕事をこなし、指示を与えていく様は、普段の彼と何ら変わりがない。いかにも仕事が出来る上司だ。

柊一の部屋で目を覚ましたあの土曜日の朝、咲良はつい売り言葉に買い言葉で、彼から提案された「ゲーム」なるものを受け入れてしまった。あの時は引くに引けない状況だと思ったが、家に帰って冷静になって考えてみると、とんでもない約束をしてしまったことに青くなった。

これから自分の身にどんな災難が降りかかるのかと思うと、気が気でない。そんなふうに週末は柊一のことばかり考える始末で、ゆっくり読もうと思っていた本も、録画し

ておいた映画も全く楽しめなかった。

柊一と顔を合わせるのが気まずくて、今朝だって急に熱が出てくれないかと、布団の中で何度も体温計を眺めたくらいだ。……残念なことに健康としか言いようのない平熱だったが。

咲良は出社することさえ憂鬱で仕方がなかったというのに、当の柊一はというと全くもっていつも通りだった。

それはもう、身構えていた自分がバカらしくなるくらいに。

「紺野」

突然柊一に名前を呼ばれ、咲良はびくっと肩を揺らす。けれど動揺していることを気付かれたくはなくて、無表情のままで立ち上がり、彼のデスクの前に行った。

「何でしょうか、室長」

「ああ、悪いけどこの資料、整理しておいてくれ」

柊一は咲良のことをちらりと見上げただけで、分厚い紙の束を差し出してくる。

「急ぎで悪いが、今日の夕方までに頼む」

「わかりました」

咲良は紙の束を胸に抱えて、柊一に背を向けた。呼び止められることもなく、自分の席までたどり着く。思わずほっと、安堵の息が漏れた。

よく考えてみれば、会社での立場も人の目もあるのだから、そうあからさまに口説いてくることなど出来るはずがない。それに柊一とは会社以外の場所で顔を合わせることなどないのだから、万が一会社終わりに誘われたって、無視を決め込めばいい……

――そうだ。心配することないじゃない。

だいたい、見る度に別の女性を連れている柊一が、よりにもよって咲良なんかと付き合う必要などないのだ。咲良がそうであったように、柊一も売り言葉に買い言葉で引くに引けなくなっただけだと考えるのが妥当だろう。

たどり着いた自分なりの結論に、ずっと憂鬱だった咲良の心は、すっと軽くなった。週末にさんざん悩んだ自分が嘘のようだ。

「よし。まずはこれを片付けないと」

急に仕事に対するやる気が漲ってきて、咲良は腕まくりをして分厚い資料に目を通し始めた。

そして気が付けば週末となり金曜日の夜。仕事が終わり帰宅した咲良は、重たいバッグを放り投げ、全身の筋肉を伸ばすように思い切り伸びをした。

「あーっ、今週も疲れた！」

そう言って、最近お気に入りのカクテルを一気に喉に流し込む。貯蓄のために贅沢は

出来ないが、一週間頑張った自分へのせめてものご褒美としてこれくらいは許されるだろう。

カクテルを堪能しながら、咲良はこの一週間を振り返っていた。

結局あれから、柊一に特に変わった様子はなかった。やはりあの「ゲーム」という発言はただの勢いだったに違いない。

「ゲーム……ねえ」

思わずぽつりと口から漏れる。そして咲良ははっとして首を振った。

せっかくの週末だというのに、柊一のことなど考えたくはない。

「もうやめ。これ以上は考えない」

咲良は残ったカクテルを一口飲むと、手元にあった小説に手を伸ばした。本当は先週末には読み終わっているはずだったのに、柊一との一件のせいで全く進んでいなかったのだ。

しおりを挟んだ場所から小説の続きを読み始める。期間が空いてしまったので少しだけストーリーの流れを見失っていて、何度かページを戻しながら読み進めていた時だった。

ぽーんと、間の抜けた部屋のチャイムが鳴った。

しおりを挟んで立ち上がり、咲良は玄関に向かって「はい」と声をかける。すると、

扉の向こうから「宅配便です」と声がかけられた。
先日ネットで本を購入したことを思い出し、咲良は何の疑問も抱かずに玄関ドアを開けた。
――そして、ドアスコープから相手を確認することなくドアを開けた自分に、激しく後悔することになる……
「よ。邪魔するよ」
片手を上げ、にっこりとさわやかな笑みを浮かべた相手は、ドアを開けた咲良を押し退けるようにしてずかずかと部屋の中に入ってきた。あまりにも突然のことに、その人間――佐伯柊一を遮ることも出来ないまま、咲良は簡単に部屋への侵入を許してしまった。
「し、室長？　どうして私の家を知って……」
突然に押し入ってきた招かれざる客に、咲良は呆然としたままで声をかける。
「ん？　ああ、企画室の女子社員から聞いた。大事なデータを渡し忘れたってことにして。それよりも、ただいま」
柊一はそう答えながら、部屋の真ん中にどかりと座り込み、ネクタイを緩めている。
ただいまってどういう意味だ？　とか、今は考えることも出来なかった。ただ、わかっているのはたったひとつ……

「不法侵入です。室長」
「ん？　だってお前、自分でドア開けただろう？」
「宅配便だって言われたからです」
ドアの向こうにいるのが柊一だと知っていたなら、咲良は当然開けなかった。それどころか、居留守だって使ったかもしれない。
「だってそうでも言わなかったら、ドア開けなかったろ？」
「当たり前です」
「じゃ、仕方ない。確認しなかったお前が悪い」
悪びれる様子もなくそう言われてしまうと、どう返していいかわからず、咲良は口をパクパクさせた後、がっくりと項垂れた。残念ながらこういった場面で上手く反論するスキルは低い。人との関わりを避けてきたツケだ。
部屋に柊一がいるだけでも大問題なのに、彼の傍らにあるものは咲良をぎょっとさせた。できればその存在をスルーしたいと切望したが、触れないわけにはいきそうもない。
ずり下がった眼鏡を押し上げながら、咲良はゆっくりと口を開いた。
「室長。その荷物は……何でしょうか？」
「ああ、これか？」
咲良が指差したものは、紛れもなくボストンバッグと呼ばれるものだった。しかも長

立ち読みサンプルはここまで

期出張にでも出かけようかというような……

まさか、という嫌な予感が咲良の中で膨らんでいく。そんな自分の考えを振り払いたくて、「出張の帰り」だとか「これから出張」だなんて言葉を期待する。けれど。

「俺の荷物だ。しばらくお前の部屋に住むことに決めたから」

王子と呼ばれる所以たる甘い笑みを浮かべ、柊一はとんでもないことを口にした。咲良はその場に崩れ落ちてしまいそうになるほどのめまいと頭痛と倦怠感を一気に覚えた。

「……ふざけないでください」

やっとの思いでそれだけ口にする。

これでも十分に抑えて言った方だと思う。「頭おかしいんですか」とか「脳みそ沸いてるんですか」とか……その他諸々、もっと汚い言葉を口にすることも出来たものの、一応は会社の上司なんだという気持ちが咲良をギリギリの所で押し止めた。

咲良が必死に自分をセーブしているというのに、当の柊一はけろりとした様子だ。

「ふざけてなんかないさ。俺はゲームに勝つって言ったろ？」

「だいたいそのゲームっていうのも単なる売り言葉に買い言葉で、引くに引けなくなって口にしただけじゃないんですか？」

そうだと思っていた。いや、そうだと思いたかったのに。

「は？　何のことだ？　俺は本気でゲームをするって言ったんだが」

そう言い切る柊一に、咲良の希望的観測は粉砕される。そしておかげさまで、一気にパニックに陥ってしまった。もうゲームなんて本気ではなかったと思い込んでいたから。しかもここに住むだなんて……

「こ、困ります……ここに住むなんて」

「困る、じゃないぞ。よく思い出せ、紺野。俺もお前もあの時禁止事項なんて作らなかったろ？　だったらこうして押しかけるのだってルール違反じゃない。違うか？」

真面目くさった顔で言い募られ、咲良は思わずぐっと言葉を呑んだ。

「禁止事項を決めなかったんだから、これはしてはいけないという行為はない。そうだろう？　だとしたら俺は、出来ることを全力でするだけだ。仕事だって同じだろ？　全ての力を持って、ベストの結果のために出来得る限りの努力を惜しまない。違うか？」

その淡々とした口調は真面目くさった表情と相まって、まるで職場で仕事の話をしているような感覚を咲良に抱かせた。そのおかげで、咲良は妙な冷静さを取り戻す。

感情を前面に出して声を荒らげでもされたら、何も言えなかったかもしれない。感情むき出しの会話は苦手だ。けれど淡々と事実を述べるだけならば得意だ。

俯けていた顔を上げ、咲良は眼鏡越しに柊一を真っ直ぐに見据えた。

「勝手なことを仰らないでください。次期社長とひとつ屋根の下に住んでいるなんてばれたら、立場が危うくなるのは室長ではなく、私の方です。もしもの時はどうしてくれ